

P2-015

通常学級に在籍する先天性心疾患をもつ 児童・生徒に対する支援のあり方に関する 研究

—保護者へのインタビュー調査から—

室 正人¹、成田 泉¹、島田 明子¹、水内 豊和²

¹富山大学 大学院 人間発達科学研究科、

²富山大学 人間発達科学部

【問題と目的】

医学の進歩に伴い、9割の小児慢性特定疾患児が、通常学級に在籍する現状がある。しかし、依然、学校生活において教師や周囲の子どもたちが病気について理解できるような対応が必要（菊池・守屋，2011）との指摘がある。また長い年月において、小児慢性特定疾患児に同伴していく親たちの物的・心理的負担は図り知れないものがある（津島，1996）。特に先天性心疾患の場合、家庭にあっては病気と共存しながら、思春期・成人期になっても両親に対する依存度が強い（武田，2005）。そこで本研究ではA県内における先天性心疾患に罹患した経験を持つ児童・生徒の保護者へのインタビューから、学校教育を中心にして支援のあり方について考察することを目的とする。

【方法】

先天性心疾患を罹患している児童・生徒の保護者5名（父1、母4）を対象に、発症時から療養時に至るさまざまな困りごとや要望などについて半構造化インタビュー調査を実施した。分析にはM-GTAを用いた。

【結果】

分析の結果、「親は出生時、我が子が先天性心疾患であることを知り不安と自責の念を感じる」こと、また「手術、入退院など療養生活が続くこともあり、そのためのストレス状態が出生時から学齢期、成人期へと時にあきらめの思いもよぎる」ことなどが明らかとなった。先天性心疾患児は、病気の進行に伴い入院・手術を余儀なくされることで、保育や教育の場の変更が行われることがある。この時の子どもの不安やとまどいは、親にとっても心理的負担となる。その中でも親たちを支えるのは、「子どもの成長への喜びであり、夫や家族の存在」、「患者会や同じ疾病を持つ先輩の母親、そして地域の友人たちへの感謝の思い」などであった。

【考察】

本研究では、現在から将来にかけて、生活全てにおいて健康不安を抱える心理的状态の中で、親子ともども生きている姿が浮き彫りになった。いつ何が起こるか分からない不安の中にいる児童・生徒と保護者に対して、病気や対処法を知り、ともに歩む学校教育である必要がある。また何より周囲の無知に対して、弱者をみつめつつ命の尊さを重視する教育を進めること、保護者の心理的負担感を理解しつつ、つかず離れずの情報提供と相談可能な環境とが必要と考えられる。行政には医療的なケア（特に在宅酸素など）、個別の病気（障害）への理解が充分になされるような支援の充実が望まれる。

P2-016

大学病院小児歯科における口腔外傷患者 実態調査

—17年前の受診状況と処置内容の比較—

中村 浩志¹、中村 美どり²、大須賀 直人¹

¹松本歯科大学 小児歯科顎講座、

²松本歯科大学口腔生化学講座

【要旨】

我々は、2007年4月から2010年3月までの3年間に本院小児歯科へ口腔外傷を主訴として受診した0歳から15歳の233人（男154人、女79人）を対象として調査を行い、17年前に行った同様の調査報告と比較検討を行った。1. 受傷時年齢は幼児期後期が最も高いが、17年前の45.5%から38.2%と減少傾向を示した。学童期後期についても17年前の15.6%から10.7%へと減少傾向を示した。一方、幼児期前期は17年前の13.8%から25.3%と増加傾向が認められた。2. 受傷原因は、17年前は打撲による受傷が35.9%と最も多く、次いで転倒25.7%、親の目が届かない原因不明の受傷が24.6%の順で多かったが、今回は転倒による受傷が55.4%と最も多く、次いで衝突18.9%の順であった。3. 受傷の既往歴があった小児はほぼ変わらなかったが、受傷の既往が不明である割合は17年前の22.8%から0.4%へと減少傾向を示した。4. 受傷部位については17年前とほぼ同様で、上顎前歯部の受傷が約7割を占めた。5. 受傷様式では、17年前と比べ軟組織の裂傷を合併するものが多い傾向を示した。6. 来院までに何らかの処置を受けた者は17年前も現在も約15%とほぼ同じ割合であった。初診時の処置は経過観察が多いが、今回は整復固定といった機能維持や修復による審美回復の処置が増加傾向を示した。